

■作者名/神吉 廣純・作品名/想 月・サイズ/高さ184cm×幅184cm

AWA

awa onna akindo juku
おんなあきんど塾

阿波丸
おんなあきんど

AWA ONNA AKINDO JUKU

2000 第7号

コラボレーションから生まれた ビジネス・起業家たち

なかなか好転しない経済情勢下では、起業家の成長により生み出される“新ビジネス”を待ちきれず、企業による新たなビジネス展開にいま期待がかかっています。

AWAおんなあきんど塾メンバーが、地域経済の活性化を目標にさまざまな提言やアクションを起こして4年。その1つとして女性起業家の育成にウエイトを置いた活動から社会保険労務士、甘味の店、不動産業、リサイクルショップ、などまさに女性の感性による開業・起業家が出現してきました。

また最近では、AWAおんなあきんど塾メンバーが支援にかかわった起業家とともに新たなビジネス展開をするなど、「企業家」と「起業家」のコラボレーションによるビジネスや商品が生まれています。

これぞまさに“共創”から誕生したビジネス—。
今号では、これらの事例を紹介します。

CASE.1

テーブルディスプレイ



島内陽子さん●テーブルコーディネーター。徳島市南昭和町1丁目
98年にテーブルコーディネートコンテスト入賞後、毎年いろいろなコンテストで受賞。現在は自宅での講座開校やスクールでの講座を受け持つほか、ショーウィンドーなどのディスプレイを行っている。将来は、テーブルまわりをトータル提案していきたいと考えている。

profile

食卓談義でスタート 嬉しかった仕事の進め方

99年10月から自宅でテーブルコーディネートの教室を開催しています。昨年の12月には、市内でテーブルコーディネート展も開催して、おかげさまで好評をいただきました。

私は、もともとインテリアコーディネーターとして市内の企業で働いていて、結婚を機に東京に行ってからテーブルコーディネートを学んだんです。

父と妹が陶芸家という環境もあって、ゆくゆくは文化に関わる器やテーブルまわりのものも扱うお店も持ちたいと考えていたのですが、AWAおんなあきんど塾の角元さんなどから「まずコーディネーターとして知名度を高めてから、あのコーディネーターが開いたお店ということ売り込んだら？」という助言もいただいたりして、いまがんばっています。

実はこちらに帰ってから、AWAおんなあきんど塾のセミナーに2回参加しました。3年前に初めて参加したときには、私自身まだ何をしたいという具体的なものは持ってい



COLLABORATION

植田貴世子さん●株式会社ステラ代表取締役・AWA
おんなあきんど塾メンバー
本社：南常三島町3丁目、創業：1985年、
従業員：100人、事業内容：保育サービス、英会話スクールのほかに、人材育成・派遣のClassy incを経営

profile

CASE.1

互いの経験を超えた共感 起・企業家の共創へ可能性

ないこともあって、ただただ皆さんのエネルギーに圧倒されただけだったのですが、昨年7月のたまごセミナーではある程度持っていたので、事業プランをたてるのに大変参考になりました。

そんなご縁であきんど塾の植田さんとも知り合いました。

あるショップのディスプレイに関わらせていただくことになったのですが、単に仕事の発注側、受注側といった関係ではなく、食卓に対する考えやひいては食卓を囲む家族への思いといったことにまで及んだお話ができて、テーブルコーディネーターとして嬉しかったですね。

私、テーブルコーディネーターは「人と人とのコミュニケーションをスムーズにするために必要なもの」だと考えているんです。ですから、業界では不毛地帯と言われている徳島でがんばって、後輩も育てて、多くの仲間とのネットワークでこの仕事の認知度を高めていきたいと思っています。

起業家・企業家には、年齢をこえて経験や業種の壁をこえてお互い共感できるものがあるのではないのでしょうか。

その共感があると、会話はどんどん広がりを持ち心がわくわくしてきます。ここまで高まると、共創への可能性が視野に入ってくるのです。

島内さんとの出会いは、恐らくこの経緯を踏んで共にお仕事をする機会を得るまでに至ったような気がするのです。

自らの哲学に忠実に行動する時、何かを目指す時、自らの持つ目標に到達しようと努力する時、自らの中

にひたむきな姿勢が生まれます。

自らの中に“誇り”が芽生えてきます。

このひたむきさ、この誇りは不思議に人を謙虚にします。ひたむきさと誇りに裏付けられた謙虚さは、その人の尊敬でもあるのです。お互いの尊敬を認め合った時、私たちは同じステージに立てるのです。

これからも島内さんとは、共創の中から新しいものを生み出す喜びを分かち合うことで2人の達成感、充実感につながる期待を共有し、せっかくのすてきな出会いを大切に育んでいきたいと思っています。

解説

collaboration[コラボレーション]

さまざまな背景をもった人間がある目標に向けて協力して新しいアイデアを創発すること。従来になかった発想を得ること。特に異なる分野の人間のコラボレーションを異分野コラボレーションと呼ぶ。個々の人間の発想が互いに補完するという効果だけでなく、異なる視点を交差させることで新たな視点を見いだすことができる。以前から芸術創作の一形態として存在したが、現在は工学におけるモノ作りの一形態となりつつある。
—99年版イミダス・集英社(参考)—

CASE.2

ホームビジネスネットワーク

COLLABORATION



協力者の“内職”さん
独立で商品の品質アップに

私が20年前にいまの仕事を始めたとき、パートナーとして選んだのが“内職さん”でした。

育児、介護、健康問題を抱え働きたくても現在の労働形態では働くことができない人、女性には多いんですよ。

そういう人たちが募って商品を作っていました。そのときは例えばひも通しや飾り付けなど部分的な作業の量をこなしていき、の古い形の仕事の発注をしていました。

かなりの間このやり方でやってきましたが、でも人間で達成感によって仕事への意欲が湧いてくるものなんですよね。

それで、1個の商品製作をオーダーするようにしてみました。つまり内職さんは完成させた商品を私の方に納める。これって内職さんからすれば一種の起業ですよ。

もちろんそのためには、その商品を作るための講習会を何度も開かなければなりません。私は、無料で講習会を開催し受講してもらっていますが、正直いってこれにかかるコストはかなりあります。

でも、それで人が育つことが、つまりいい作品を生み、私の方へも良いものを納入してもらえることになっていきますから。

また講師をする人も、その商品づくりを会得した内職さんのなかからやってもらうことで、自分の技術への自信と再認識につながっているようです。

最近「SOHO（ソーホー）」という言葉がよく言われていますよね。スモールオフィス・ホームオフィスだそうですが、実は私も内職さんを育てるなかで、この人たちの「持っている技術をシステム化して、

稲実房子さん ● 株式会社アゲイン代表取締役・AWAおんなあきんど塾メンバー
本社：名西郡石井町高川原、創業：1980年、従業員：9人、事業内容：民芸品デザイン卸

profile

仕事を受発注する」体制づくりにとりかかっているんです。

ホームビジネスネットワークシステムと言っています。もともとは関わっている内職さんを自宅をオフィスに開業している1人の企業者と見立てて、その人の持つ設備（ミシンの種類とか）や技術、どんな内容の仕事がやりたいか、などを登録しておき、必要に合わせた発注をしていく、ということなんです。将来的には私のいまの業種、民芸品製造に関するものだけでなく、あらゆる業種に対応できるホームビジネスのネットワークシステムにしたいと思っています。そして全国展開もできたらと考えているんですよ。

CASE.2

健康第一、でも
居ながらにしてビジネスも



西川貞子さん ● ぬいぐるみを作り始めて4年。以前は美容師として美容院を経営していた。板野郡藍住町徳命

profile

実は、誘われたものの最初はこの仕事に全く自信がありませんでした。

私はもともと美容院をやっていたのですが、美容師は一日立ちっぱなし、自分のペースではできないし、ということで少し体調をこわしていたんです。

それで、結局は自分の「健康」が第一ということで、美容院はそこそこに、稲実さんの会社の内職をし始めたのですが、でも正直言って充実感は得られませんでした。

そんなとき、稲実さんの方から提案があって「ぬいぐるみの完成品を納める」というやり方で取り引きしませんか」ということになりました。それからなんです、大きさに言えば私の人生が変わったのは。

今、2~3種類のぬいぐるみを作っていますが、楽しくしやうがない。1個1個に話しかけながらまるで魂を入れるような感じですし、納入のときはわが子を手放すようで淋しい。

美容院の方はもうやめて、現在はぬいぐるみを作る方にかかりきっています。現在では縫うだけでなく、サンプルで提案したり作り方の講師にもなったりしています。

私たちが働くときは、いろいろな形態があってもいいはず。お金が欲しいために働く、楽しみを求めて仕事をする、でも健康のことなどいろいろな制約があってもいいと思っております。私も自分の体調と付き合いながら自分のペースに合わせて責任を持って仕事をしています。近い将来、縫製の経験のある主人が今の勤め先を退職したときには一緒にやろうと思っているんですよ。

CASE.3

さまざまなビジネスプラン

人間関係がひとつの要素
会話が膨らんだアイデア



稲実房子さん



植田貴世子さん



河野世津子さん



岡部恭子さん



米川慶子さん



米川慶子さん

AWA おんなあきんど塾メンバー。5人のなかからショップ商品企画提案、内装、送迎バスデザイン、ユニフォーム企画製作、広告ツール、看板製作、ショップレイアウト、講座講師などのビジネスが生まれる。

岡部恭子さん ● 株式会社ユニフォーム代表取締役、本社：中常三島町1丁目、創業：1988年、従業員：4人、事業内容：ユニフォームの企画・販売、オリジナル製品のデザイン、コーディネート。

profile

米川慶子さん ● 有限会社フラワーショップ歴代表取締役、本社：西大工町1丁目、創業：1970年、事業内容：フラワーデザインスクール、フラワーショップ（アレンジメント・生花）。

profile

河野世津子さん ● 株式会社ワークサイン専務取締役、本社：南矢三町3丁目、創業：1972年、従業員：10人、事業内容：看板・サイン製作、イベント企画、ディスプレイ。

profile

これまでのビジネスは、単にアイテムを受発注するというやり方が多かったような気がします。でも、我々は、AWAおんなあきんど塾活動を4年以上一緒にやってきて、会話が膨らんだ人間関係があるんですね。「いかに徳島をイメージづけるか」などのニュアンスのところでも話ができる。

もっとこうしたい、こうなりたいなど雑談の中からアイデアが膨らんだりコンセプトになっていったりするんです。

結果、質の高い仕事ができ、当初双方が考えていたより発展的なビジネスになった、と思っています。

私自身で言っても、ビジネスはまず信頼関係を築き、進めていくようにしています。その上で提案などをさせてもらってからモノの取り引きに入る、つまり私と相手方はモノでのつながりでなく無形のソフト、感性でつながっていることになる訳です。

女性の感性って、どちらかと言えば生活から育んだものが多いでしょう。そんななかにはキラッと光るものがあるんですよ。そしてこれが、新たなビジネスの展開につながっていくのではないのでしょうか。

河野世津子さん談



あきんど塾の提言にエール!

時代要請の起・企業コラボ“うず”となって広がり期待

事業パートナーとして半年の、
デザイン会社 黒河昭一さん・情報処理サービス会社 勝瀬典雄さんから

黒河さんは昨年6月に通産省の「新規成長産業連携支援事業」のコーディネーターに認定され、アワードも同年7月から今年2月までコーディネーター機関として、私も一緒に活動しました。

私は、今回のようなコーディネート活動はボランティアであってビジネスではないと思っていますが、ボランティアかどうかの論議はともかく、これを進める黒河さんとの関係で言えばパートナーなのです。

コーディネーターをやるということは、自分の経験値を物差しにすることだと思っています。ですから2人でやることで異なる角度からみることができ、キャッチボールをしながらやっていくことで相乗効果もでてきます。

もともと我々が知り合ったのは、四国通産局のある事業がきっかけでした。アワードは第三セクターとしていろいろな制約のもと頑張っているのですが、その頑張りが成果として返ってこない。そこでアワードや黒河さんの応援団として「コーディネート活動」の部分でパートナーを買って出たのです。

それぞれの持つ経営資源のマッチングをお手伝いするコーディネーターは、閉塞感漂う中小企業にとって必要なものですが、今はまだビジネスにはなりませんし、ボランティアでいいのです。しかし将来この活動が成果をあげて、受益者などの周辺から評価が高まってきたとき、自然とビジネスになっていくでしょうから、アワードとしても事業展望が開けてくるのではないのでしょうか。

企業コラボレーションの場合、1



黒河昭一さん(左)●株式会社アワード代表取締役、徳島市福島1丁目、大手家具オフィスメーカーを経て、徳島市の第三セクターとして設立されたアワード社長。平成11年度通産省の「コーディネート活動支援事業」のコーディネーターに採択され、勝瀬さんとパートナーを組んで活動中。

勝瀬典雄さん(右)●有限会社ビジネスプランニング代表取締役、徳島市北常三島町2丁目、大手コピー器会社徳島営業所長を経て現会社を創業。現在通産省の主催する「企業お助け人」等としてボランティアで地元下請け企業の世話人を続ける。

profile

profile

人2人とつながっていくことは、単なるネットではなく、大きくなればなるほど勢いや影響力を持った“うず”となっていくものだと思います。

そういった意味で、AWAおんな

あきんど塾の皆さんが目指す「起業と企業のコラボレーション」は、まさに時代の要請にマッチしたものでないでしょうか。

(勝瀬典雄さん談)

解説

新規成長産業連携支援事業にかかる コーディネーター活動支援事業とは

通産省の施策の1つ。中小企業を取り巻く経営環境が大きく変化していくなかで、同企業が競争力を高めていくためには専門家・他企業・研究機関などの外部経営資源を有効に活用していくことが不可欠である。

しかし一方、本当に必要な外部経営資源に中小企業が自らの力で巡り合うことは極めて困難である。

そのためこのような巡り合い(マッチング)が円滑に行われるような仕組みを整備することが重要であると考えられる。

そこで、これら中小企業と外部経営資源との引き合わせ・連携を側面的に支援する活動を支援する事業をいう。

平成9年度から109の法人等が採択されており、株式会社アワードもその1つ。今回アワードは、通産省の認定を受け中小企業事業団からの委託でコーディネート活動を実施しているが、他では企業のマッチングをビジネスとした動きも見られる。

21世紀へ向けてAWAおんなあきんど塾は…

本物のビジネス育成に、ステージ作りとインキュベーションユニットで

4年間の女性起業家育成で痛感したこと。それは、起業が生半可なあいまいな気持ちでは決してできないということでした。

その緊張感は、私たち企業家の間にも強く広がってきました。

いま時代背景も関係して、前代未聞の不況のまったただなか、日本中の人々がビジネスチャンスを狙って起業しようとしています。

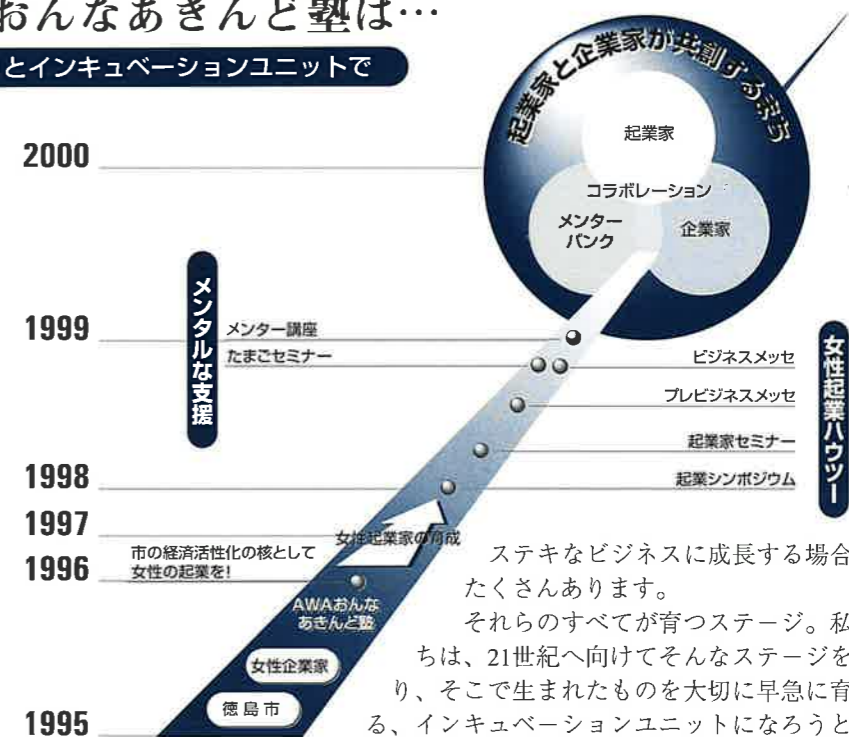
しかし、21世紀に向けて、本当にビジネスのステージに立つことができるのは、本物のビジネスしかありません。

そこで、私たちは頭を寄せあい、考え抜いて、そして本物のビジネスを生み出そうとしています。

幸い私たちAWAおんなあきんど塾メンバーは、経済の活性化を目的として集まった仲間です。いままでのキャリアやスキルを寄せ集めれば、どんなことでも生まれてくる素晴らしい集合体なのではないか、そう自負しているのです。

私たち企業家やまさに起業しようとしている人、メンター。みんなでアイデアを出し合うのです。

ビジネスは、偶然生まれることもとても素晴らしいし、



ステキなビジネスに成長する場合もたくさんあります。

それらのすべてが育つステージ。私たちは、21世紀へ向けてそんなステージを作り、そこで生まれたものを大切に早急に育て、インキュベーションユニットになろうと考えているのです。

最後に、私たちが考える「本物のビジネス」とは、それは

- ★ビジネスを通じて社会貢献ができる
- ★まわりの人が幸せになれる
- ★収益につながっていくビジネスのことなのです。

経済と文化の融合

神吉 廣純さん

今号の本シリーズでは、99年12月に“withTAC神吉廣純展”を開催、続いて2000年1月にモダンアート徳島支部展に出展して、見る側に「絵画とデザインの世界」を改めて意識させた神吉廣純(かみよしこうじゅん)さん(38)＝モダンアート協会会員・徳島商業高校教諭＝を、同校美術部室にお訪ねしました。

—先日モダンアート展にお伺いして、先生の作品に強烈なインパクトを受けました。書き込みがすごいしディテールがしっかりして、驚くほど深い感じと感動があったのですが、先生の作品への取り組みを教えてください。

神吉 ぼくは大阪芸大のデザイン学科出身なので、絵画にとらわれることなくいろんなことを試みています。

—止まることのないチャレンジ精神を、作品から充分感じました。神吉 最近地球環境が言われていますけれど、ぼくも大きな絵画ですか



Kojun Kamiyoshi

ら、作品づくりに関してこのまま自然にやさしくない素材を使っているのがいいのか、後世でゴミになるようなものを作り続けるのか、未だに何がよいかわからないでいるのです(笑)。

それよりは小さなイラストかマンガの方が表現しやすいこともあるのではないかと、とか日々悩みながら作品を作り続けていて、それがまたつぎへの作品づくりにつながっていることも確かですね。

—最近の作品は、少女をテーマに描かれていますね。

神吉 とても表情豊かな子にめぐり会ったので、絶好のテーマになったのです。

—少女を通して、いろんな生活シーンが浮かび、見入ってしまいますね。

神吉 今は、めずらしい素材や技法にチャレンジしているところで、素材にのりを使った作品を作りつつあるところなんです。

◇
作品づくりではひとところに止まらず、常に挑戦を続ける神吉さん。

インタビュー当日の神吉さんの胸には美術部のトレードマークのクマさんのバッジが光り、さすがデザイン出身の先生らしく、部員からアイデンティティを引き出す工夫が見えて、部員への指導にご自分の作品づくりの情熱と同じものを垣間見た思いでした。

●インタビュー
AWAおんなあきんど塾
機関誌編集委員長 河野 世津子

●AWAおんなあきんど塾/稲実房子、植田貴世子、岡部恭子、角元昭子、河野世津子、佐藤公子、高畑富士子、中山律子、米川慶子、和田玲子